

## 解放の解釈学の盲点

— 解放の諸神学における聖書解釈の問題 —

小林 昭 博\*

The Blindness of Hermeneutics of Liberation

— On the Problems of Biblical Interpretation in Liberation Theologies —

Akihiro KOBAYASHI\*

(Accepted 14 July 2016)

### 1. 問題設定

1960年代後半から1970年代前半、キリスト教神学の世界に新たな潮流が出現した。現在「解放の諸神学」と呼ばれている神学的潮流である。この新たな潮流は「第三世界の抑圧や貧困からの解放」「黒人差別からの解放」「女性差別からの解放」といった現実の課題から生み出されたものである。それゆえ、解放の諸神学は「理論と実践」とを二項対立的に捉えてはおらず、したがって「神学」(theology)という静的な様態に自己を限定することはせず、政治的・社会的運動と不可分な「神学する」(do theology/doing theology)という動的な様態として自己を認識する。すなわち、解放の諸神学とは、この社会に厳然として存在する「差別・抑圧からの《解放》」を実際に求め実現する神学的・政治的・社会的な「理論と実践」であり、教会をも含めた社会を変えていく運動を展開しつつ、その運動と不可分にキリスト教神学の諸分野での学問的営為をも遂行するというものなのである。

解放の諸神学は、現在のキリスト教神学に対しても多大な影響を与えているのだが、その影響は実践神学や組織神学の分野だけに留まるものではなく、聖書学の分野にも及んでいる。解放の諸神学の聖書解釈は、その神学の名が示すように、聖書の中心的使信を「差別・抑圧からの《解放》」と見なし、聖書テキストから「差別・抑圧からの《解放》」のメッセージを読み取っていかうとするものである。

このような解放の諸神学の聖書解釈は「解放の解釈学」と称される解釈原理として理解されており、確かに聖書の中心的使信を「差別・抑圧からの《解

放》」と見なすことにはある種の真理性があり、また聖書テキストから「差別・抑圧からの《解放》」を読み取っていく試みは魅惑的でもある。だが、私見ではここに解放の解釈学の「盲点」が潜んでいると考えられるのである。

そこで、本論文では、解放の諸神学の聖書解釈を取り上げ、その解釈原理である「解放の解釈学」に隠されている「盲点」を明らかにし、現代のキリスト教の一大潮流となった「解放の諸神学」に内包される聖書解釈問題を検証することを試みる。

### 2. 解放の諸神学

— ポスト・マルクス主義時代の神学

#### 2.1. ポスト・マルクス主義時代

1960年代後半から1970年代前半にかけて、既存の体制や価値観に対する「若者の反乱」「異議申し立て」という大きなうねりが世界的に巻き起こった。

<sup>1)</sup> 「若者の反乱」「異議申し立て」は、小田垣雅也『現代のキリスト教』(講談社学術文庫1254)講談社、1996年、157、158頁が用いている表現である。同書157頁において、小田垣は「若者たちの『異議申し立て』を、この国の教会や神学界が正面からとりあげたことはほとんどなかった。そのことをわたしは常々本意に思っている」との率直な感情を吐露し、彼の言う「若者文化」との開かれた対話の姿勢を見せている。確かに小田垣は、同『知られざる神に』創文社、1980年、30-48頁、同『戦後の神学の状況 — その二(1970年代以降)』、古屋安雄/土肥昭夫/佐藤敏夫/八木誠一/小田垣雅也『日本神学史』ヨルダン社、1992年、[163-201頁]198-200頁、同『キリスト教の歴史』(講談社学術文庫1178)講談社、1995年、250-255頁といった諸著作において、1960年代後半から1970年代前半に突きつけられた「若者」からの「異議申し立て」を、自己の問題として繰り返し思索し続けており、神学者として誠実な姿勢を保持している。また、同様の問題意識は、金子啓一「民衆神学の地平」、神田健次/

\* 酪農学園大学農食環境学群循環農学類キリスト教応用倫理学研究室

Christian Studies and Applied Ethics, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

「若者の反乱」「異議申し立て」は「敗北」という形でその結末を迎え、「敗北」の虚無感はそのままその思想や運動を支えていたマルクス主義に対する失望感としても受け取られた<sup>2)</sup>。1968年にパリで勃興した五月革命の「敗北」の虚無感に覆われていたフランスでは<sup>3)</sup>、その革命思想を支えていたマルクス主義という思想的支柱を失った人々の喪失感をあたかも埋めるかのように、ジャック・デリダの「脱構築」(déconstruction)<sup>4)</sup>の思想が人々の心を徐々に捉え

関田寛夫／森野善右衛門編『総説 実践神学』日本基督教団出版局、1989年、464-481頁によっても示されている。

だが、このような誠実な姿勢が見られる一方で、近年出版された赤木善光『井上良雄と東神大紛争』東京神学大学出版委員会、2013年は、大学闘争を大学紛争としてしか理解することができずにおり、あくまでも迷惑を被った大学教員という立場に固執し、教壇や研究室から一歩たりとも出ようとはしない、ある意味では正直な、しかし実際には不誠実な姿勢を見せている。なお、大学闘争の時代に教員の側が著した誠実な姿勢を見せる著書としては、——キリスト教分野のものに限定するが——滝沢克己『私の大学闘争』三一書房、1972年、高尾利数『キリスト教主義大学の死と再生』新教出版社、1969年、同『イエスは全共闘をどう見るか』自由国民社、1970年、田川建三『授業拒否の前後——大学闘争と私』『批判的主体の形成——キリスト教批判の現代的課題』三一書房、1971年、195-218頁がある。

<sup>2)</sup> 竹田青嗣『現代思想の冒険』(ちくま学芸文庫)筑摩書房、1992年、25-37頁参照。

<sup>3)</sup> 五月革命については、西川長夫『パリ五月革命 私論——転換点としての68年』(平凡社新書595)平凡社、2011年参照。

<sup>4)</sup> ジャック・デリダは、Edmund Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*, in: *Husserliana VI*, Haag: Martinus Nijhoff, 1952, 21962, 365-386 (エドゥムント・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫／木田元訳、中央公論社、1974年)に、一冊の書物になるほどの長大な序説を添えて、1962年にそのフランス語訳 Edmund Husserl, *l'Origine de la géométrie*, traduction et introduction par Jacques Derrida, Paris: Presses Universitaires de France, 1962 (エドゥムント・フッサール『幾何学の起源』(新装版)ジャック・デリダ序説、田島節夫／矢島忠夫／鈴木修一訳、青土社、1992年)を世に送り出し、すでにフランスの哲学界に登場していた。だが、彼の思想が西洋形而上学の「脱構築」という壮大な思想的営為としてその狼煙を上げるのは、やはり1967年と1972年に上梓された以下の著作からである。Jacques Derrida, *A voix et le phénomène. Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, Paris: Presses Universitaires de France, 1967 (ジャック・デリダ『声と現象』高橋允昭訳、理想社、1970年); idem, *De la grammatologie*, Paris: Éditions de Minuit, 1967 (同『根元の彼方に——グラマトロジーについて 上・下』足立和浩訳、現代思潮社、上巻1971年、下巻1972年); idem, *L'Écriture et la différence*, Paris: Éditions du Seuil, 1967 (同『エクリチュールと差異 上・下』(叢書・ユニベルシタス79・80)若桑毅／野村英夫訳、法政大学出版局、上巻1977年、下巻1983年); idem, *La Dissémination*, Paris: Éditions du Seuil, 1972 (同『散種』(叢書・

始めたのであった<sup>5)</sup>。

## 2.2. 解放の諸神学

### ——ポスト・マルクス主義時代の神学

デリダに象徴されるポスト・マルクス主義時代の幕開けは、現在ではポストモダンないしポスト構造主義と称される思想的潮流の始まりとして理解されているが<sup>6)</sup>、この新たな思想的潮流の到来と時を同じくして、キリスト教神学の世界では、ラテン・アメリカの「解放の神学」(teología de la liberación/theology of liberation/liberation theology)が陽光のように登場し<sup>7)</sup>、ポスト・マルクス主義時代の要請に応じるかのように<sup>8)</sup>、貧困に喘ぐ第三世界の「解放」を求める新たな「神学」を誕生させたのである<sup>9)</sup>。

ユニベルシタス 989)藤本一勇／立花史／郷原佳以訳、法政大学出版局、2013年); idem, *Marges de la philosophie*, Paris: Éditions de Minuit, 1972 (同『哲学の余白 上・下』(叢書・ユニベルシタス771・772)高橋允昭／藤本一勇訳、法政大学出版局、上巻2007年、下巻2008年); idem, *Positions*, Paris: Éditions de Minuit, 1972 (同『ポジション』高橋允昭訳、青土社、1981年)。

<sup>5)</sup> この歴史認識ないし時代認識については、竹田『現代思想の冒険』72-77頁参照。

<sup>6)</sup> しかし、ポスト・マルクス主義時代の到来が、即「マルクス／マルクス主義の終焉」を意味するわけではなく、ポストモダンの時代になって漸く「マルクスを読む」ための機が熟したとも言われている。この点については、柄谷行人『マルクスその可能性の中心』(講談社学術文庫931)講談社、1990年、238-240頁、浅田彰『逃走論——スキャン・キッズの冒険』筑摩書房、1984年、106-117頁を参照。

<sup>7)</sup> Gustavo Gutiérrez, *Teología de la Liberación. Perspectivas*, Lima: CEP, 1971 = *A Theology of Liberation: History, Politics and Salvation*, translated and edited by Sister Caridad Inda/John Eagleson, Maryknoll, New York: Orbis Books, 1973 = グスタヴォ・グティエレス『解放の神学』(岩波現代選書)関望／山田経三訳、岩波書店、1985年 = 復刻版『解放の神学』(岩波モダンクラシックス)関望／山田経三訳、岩波書店、2001年。なお、日本語訳では脚注の詳細な論述が省略されているので、脚注での議論は英語訳によって補う。

<sup>8)</sup> ラテン・アメリカの解放の神学とマルクス主義との関係については、グティエレス『解放の神学』12-13, 30-38, 225-226, 241-250, 276-284頁ほか(Gutiérrez, *A Theology of Liberation*, 9-10, 18, 27-33, 219f., 232-239, 241f., 248-250, 272-279, 284f. et al.), フィリップ・ベリマン『解放の神学とラテン・アメリカ』後藤政子訳、同文館、1989年、110-118, 161-177, 179-195頁(Phillip Berryman, *Liberation Theology: Essential Facts about the Revolutionary Movement in Latin America and Beyond*, Philadelphia: Temple University Press, 1987, 87-93, 125-137, 138-150)参照。

<sup>9)</sup> 「解放の神学」に影響を与えた神学としては、「希望の神学」(Jürgen Moltmann, *Theologie der Hoffnung. Untersuchungen zur Begründung und zu den Konsequenzen einer christlichen Eschatologie*, München: Christian Kaiser Verlag, 1964, 121985 = ユルゲン・モルトマン『希望の神学——キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』(現代神学双書35)高尾利数訳、新教出版

ラテン・アメリカの解放の神学と相前後して、北アメリカでは「黒人神学／解放の黒人神学」(black theology/black theology of liberation) が興り<sup>10)</sup>、白人主義を破壊し、黒人が黒人として自らの尊厳を取り戻すための神学を生み出し、それと同時期に現在「フェミニスト神学」(feminist theology) と呼ばれる新たな神学が提唱され<sup>11)</sup>、家父長制の宗教であるキリスト教を根源的に批判し、キリスト教によって抑圧され続けてきた女性の「解放」を希求したのである。

アジアに視点を転ずると<sup>12)</sup>、韓国では民主化闘争のなかから「民衆神学」が興り<sup>13)</sup>、その時代の独裁政

権からの民衆の「解放」を求める神学を紡ぎ出し、少し時代を置いた日本では、部落差別からの「解放」を希求する「荊冠の神学」が提唱され<sup>14)</sup>、部落差別という日本の文脈と解放の諸神学が置かれている文脈とを結び付ける独自の神学を生み出したのである。

これらの新しい神学的潮流に共通するスローガンは「解放」(liberation) であり、キリスト教の神学やその宣教の主題を「差別・抑圧からの《解放》」と見なす共通性のゆえに、「解放の諸神学」(theologies of liberation/liberation theologies) との総称が付されるほどに<sup>15)</sup>、この新たな神学的潮流は現代のキリスト教神学に多大な影響を与えるようになったのである。

### 3. 解放の諸神学の聖書解釈

#### 3.1. 解放の諸神学の旧約聖書解釈

##### — 出エジプトの解放

この新たな神学的潮流の影響は、実践神学や組織神学の分野だけに留まるものではなく、当然のことながら聖書学にも及び、その聖書解釈はこの神学の主題に従って、聖書の中心的使信を「差別・抑圧からの《解放》」と見なし、その視点から聖書を読み解いていく試みを実践してきたのである。

旧約聖書解釈におけるそのもっとも顕著な現れは、ラテン・アメリカの解放の神学を発祥地として提起された旧約聖書解釈であり、旧約聖書の中心的使信を「出エジプトの《解放》」の歴史的出来事のみに見いだすというものである<sup>16)</sup>。すなわち、エミール・L・ファッケンハイムの表現を借りるならば、

社、1968年)、「政治的神学」(Johann Baptist Metz, *Zur Theologie der Welt*, Mainz: Matthias-Grünwald-Verlag/München: Christian Kaiser Verlag, 1969)、「革命の神学」(Richard A. McCormick, S.J., *The Theology of Revolution*, *ThSt* 29/4 (1968), 685-697), などがあげられる(グティエレス『解放の神学』49, 217-250頁=Gutiérrez, *A Theology of Liberation*, 45, 51 n. 5, 213-250 参照)。詳しくは、ユルゲン・モルトマン『聖霊の力における教会』(現代神学双書 68)喜田川信／藤井政雄／頓所正訳, 新教出版社, 1981年, 36-37頁(Jürgen Moltmann, *Kirche in der Kraft des Geistes. Ein Beitrag zur messianischen Ekklesiologie*, München: Christian Kaiser Verlag, 1975, 1989, 31), Thorwald Lorenzen, *Resurrection and Discipleship: Interpretive Models, Biblical Reflections, Theological Consequences*, Maryknoll, New York: Orbis Books, 1995, 85-106 を参照。

<sup>10)</sup> James H. Cone, *Black Theology and Black Power*, New York: The Seabury Press, 1969 (ジェームズ・H・コーン『イエスと黒人革命』大隅啓三訳, 新教出版社, 1971年); idem, *A Black Theology of Liberation*, Philadelphia: Lippincott Company, 1970 = *A Black Theology of Liberation*, twenties anniversary edition with critical reflection by Dolores S. Williams, Gayraud Wilmore, Rosemary R. Ruether, Pablo Richard, Robert McAfee Brown and K. C. Abraham, Maryknoll, New York: Orbis Books, 1990 (同『解放の神学—黒人神学の展開』梶原寿訳, 新教出版社, 1973年)。

<sup>11)</sup> Mary Daly, *The Church and the Second Sex*, Boston: Beacon Press, 1968 (メアリー・デイリー『教会と第二の性』岩田澄江訳, 未来社, 1981年); eadem, *Beyond God the Father: Toward a Philosophy of Women's Liberation*, Boston: Beacon Press, 1973。

<sup>12)</sup> アジアにおける「解放の神学」の受容およびその展開については、ルーベン・L・F・アビト／山田経三『解放の神学が問いかけるもの—アジアの現実と日本の課題』女子パウロ会, 1985年, 同『解放の神学と日本—宗教と政治の交差点から』明石書店, 1985年, 東海林勤「アジア的視点における日本の教会」, 神田／関田／森野編『総説 実践神学』444-463頁, 山田経三『解放の神学—第三世界民衆との連帯を求めて』, 神田／関田／森野編『総説 実践神学』482-501頁ほかを参照。

<sup>13)</sup> キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』李仁夏／木田献一監修, 教文館, 1984年, 徐南同『民衆神学の探究』金忠一訳, 新教出版社, 1989年, 安炳茂『民衆神学を語る』趙容来／桂川潤訳, 新教出版社, 1992年, 富坂キリスト教センター編『民衆が時代を拓く—民衆神学を巡る日韓の対話』新教出版社, 1990年。

<sup>14)</sup> 栗林輝夫『荊冠の神学—被差別部落解放とキリスト教』新教出版社, 1991年。「荊冠の神学」のその後の展開については、同「自著を語る『荊冠の神学』』『本のひろば』409号, 財団法人キリスト教文化センター, 1992年10月号, 1-3頁, 同「荊冠の新たな神学知に向けて—教会の任務についての提言」『福音と世界』新教出版社, 1994年2月号, 8-16頁参照。

<sup>15)</sup> Robert H. King, *The Task of Theology*, in: Peter C. Hodgson/Robert H. King (eds.), *Christian Theology: An Introduction to Its Tradition and Task*, Philadelphia: Fortress Press, 1985, [1-27] 24f.; 栗林『荊冠の神学』487頁注1, 同「イスラエル『賤民』層とイエスの解放」『聖書と教会』日本基督教団出版局, 1990年5月号, 8頁, 渡辺英俊「教会変革への過渡的提案—続・神学にとっての移住労働者問題」『福音と世界』新教出版社, 1994年2月号, 22頁, Lorenzen, *Resurrection and Discipleship*, 85-106 参照。なお、ベリマン『解放の神学とラテン・アメリカ』211-232頁(Berryman, *Liberation Theology*, 162-178), 小垣垣『知られざる神に』92-93頁, 同『現代のキリスト教』263-266頁をも参照。

<sup>16)</sup> José Severino Croatto, *Exodus: A Hermeneutics of Freedom*, English translation by Salvator Attanasio, Maryknoll, New York: Orbis Books, 1981, iv 参照。

出エジプトの出来事はイスラエルの民にとっての「根源的な体験」(root experience)なのであり<sup>17)</sup>、ホセ・セヴェリノ・クロアットの言い回しを用いるならば、出エジプトの出来事はイスラエルの民にとっての「根本の資料」(radical datum)なのである<sup>18)</sup>。そして、このふたりに依拠しつつ、ドロテー・ゼレは「聖書の信仰は解放の歴史的出来事に起源を持つのであって、創造信仰に起源を持つのではない」<sup>19)</sup>とのテーゼを提出し、聖書の信仰の起源を——聖書劈頭の創造物語にではなく——出エジプトの解放という歴史的出来事に求めたのである。

このように、解放の諸神学の影響下にある旧約聖書学者や神学者たちは、出エジプトをイスラエルの信仰の「根」(radix)と見なし<sup>20)</sup>、出エジプトのテキストに特権的地位を与えているのだが<sup>21)</sup>、このような出エジプトの位置づけは、マルティン・ノートが「エジプトからの導き出し」は「イスラエルの原信仰告白(Urbekanntnis)」に関係していると推定していることとも符合し<sup>22)</sup>、旧約聖書学的な妥当性をも有していると言えるのである<sup>23)</sup>。

### 3.2. 解放の諸神学の旧約聖書解釈

#### ——解放者イエス

旧約聖書解釈に議論を移すと、ひとつの前提として指摘すべきことは、「解放」の視点に立って旧約聖書を解釈する主要な見解は解放の諸神学から生み出されたものだという点である<sup>24)</sup>。すなわち、従来の旧約聖書学においては、ほとんどの場合、「解放」は「救済」の意で理解されており、要するにそれは来世の宗教的な「解放/救済」を意味していたのである。だが、解放の諸神学はそれを現世の社会的・政治的な「解放/救済」として捉え直す方向へと歩みを進めたのである。

ここにはポスト・マルクス主義時代の神学である解放の諸神学が、まさにポスト・マルクス主義時代の要請に応え、貧困と抑圧からの民衆の「解放」へと向かうという時代的・社会的状況があったものと考えられる。この点の時代的・社会的な状況の理解に関しては、現代の代表的マルクス主義文学批評家であるテリー・イーグルトンがマルクス主義を次のように定義していることが参考になる。

マルクス主義は人間社会とその社会を変革する実践についての科学理論である。その意味をさらに具体的に突き詰めれば、マルクス主義が述べねばならないのは、人間男女がある種の搾取や圧制形態から自分たち自身を解放しようとする苦闘の物語である<sup>25)</sup>。

すなわち、解放の諸神学はマルクス主義の抑圧や搾取からの人間の「解放」(liberation/free)という目標と課題とを引き継ぎ<sup>26)</sup>、さらに理論と実践とが不可分であるとの認識をも受け継いでいるというこ

<sup>17)</sup> Emil L. Fackenheim, *God's Presence in History: Jewish Affirmation and Philosophical Reflection*, New York: Harper & Row, 1970, 9.

<sup>18)</sup> Croatto, *Exodus*, 13.

<sup>19)</sup> Dorothee Soelle with Shirley A. Cloyes, *To Work and to Love: A Theology of Creation*, Philadelphia: Fortress Press, 1984, 7.

<sup>20)</sup> 「根」(radix)の特別な意義については、Fackenheim, *God's Presence in History*, 9; Soelle with Cloyes, *To Work and to Love*, 7 参照。

<sup>21)</sup> J. Andrew Kirk, *Liberation Theology: An Evangelical View from the Third World*, Atlanta: John Knox Press, 1979, 95-104, 147-152. なお、マイケル・ウォーザー『出エジプトと解放の政治学』(21世紀キリスト教選書1)荒井章三訳、新教出版社、1987年、15-24頁(Michael Walzer, *Exodus and Revolution*, New York: Basic Books, 1985, 3-10)をも参照。

<sup>22)</sup> マルティン・ノート『モーセ五書伝承史』山我哲雄訳、日本基督教団出版局、1986年、94頁(Martin Noth, *Überlieferungsgeschichte des Pentateuch*, Stuttgart: Kohlhammer, 1948, 50)。

<sup>23)</sup> ここでは出エジプトに集中したために、女性神学の旧約聖書解釈に触れることができなかった。旧約聖書学の分野では、フィリス・トリプル『神と人間性の修辞学——フェミニズムと聖書解釈』河野信子訳、ヨルダン社、1989年(Phyllis Trible, *God and the Rhetoric of Sexuality*, OBT 2, Philadelphia: Fortress Press, 1978), 同『旧約聖書の悲しみの女性たち』河野信子訳、日本基督教団出版局、1994年(eadem, *Texts of Terror: Literary-Feminist Readings of Biblical Narratives*, OBT 13, Philadelphia: Fortress Press, 1984)といった研究が高く評価されている。

<sup>24)</sup> Tina Pippin, Ideological Criticism, Liberation Criticism, and Womanist and Feminist Criticism, in: Stanley E. Porter (ed.), *Handbook to Exegesis of the New Testament*, NTTS XXV, Leiden/New York/Köln: Brill, 1997, 267-275, esp. 267f. 参照。

<sup>25)</sup> テリー・イーグルトン『マルクス主義と文学批評』(クラテール叢書4)有泉学宙/高橋公雄/清水英之/田形みどり/松村美佐子訳、国書刊行会、1987年、10-11頁(Terry Eagleton, *Marxism and Literary Criticism*, Berkley/Los Angeles: University of California Press, 1976, vii)。

<sup>26)</sup> なお、浅野淳博「社会科学批評」、同/伊東寿泰/須藤伊知郎/辻学/中野実/廣石望/前川裕/村山由美『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局、2016年、100頁および同頁注3は、マルクス主義聖書批評が解放の神学やフェミニスト神学へと引き継がれてきたことを指摘し、さらに日本におけるこの方向の研究の代表として、田川建三『原始キリスト教史の一断面——福音書文学の成立』勁草書房、1968年をあげている。

とである<sup>27)</sup>。

このような影響を受けつつ、解放の諸神学はイエスの活動や宣教をこの世界における「差別・抑圧からの《解放》」の使信であると見なし、イエスを「解放者イエス」(Jesus the Liberator)として捉え<sup>28)</sup>、そこに新約聖書の中心的使信を見ようとしているのである。つまり、解放の諸神学にとって、新約聖書の中心的使信は史的イエス自身であり<sup>29)</sup>、史的イエスとの関わりにおいて「差別・抑圧からの《解放》」を捉えていこうとしているということである。

### 3.3. 解放の解釈学

#### — 解放の諸神学の聖書解釈

上述の議論からも窺い知られるように、解放の諸神学の聖書解釈とは、旧約聖書の中心的使信を「出エジプトの《解放》」に求め、新約聖書の中心的使信を「解放者イエス」に見出すというものである<sup>30)</sup>。すなわち、従来のプロテスタント神学がルター的「信仰義認論」を「正典のなかの正典」(Kanon im Kanon)として位置づけてきたことに対して、解放の諸神学は—その名の通り—「解放」を新たな「正典のなかの正典」として聖書の中心的使信として位置づけようとしているということである<sup>31)</sup>。

したがって、解放の諸神学の聖書解釈は、聖書テキストから「差別・抑圧からの《解放》」を読み取っていくというものであり、それゆえ聖書を「差別・抑圧からの《解放》」をもたらし「福音」として理解しようとする神学にはかならないのである<sup>32)</sup>。そし

て、これはラテン・アメリカの解放の神学者が「解放の解釈学」(hermeneutics of liberation)と名づけた聖書解釈の新たな方法論であり<sup>33)</sup>、すでに聖書学の新しい方法論としても位置づけられているのである<sup>34)</sup>。

## 4. 解放の解釈学の盲点

### — 解放の諸神学における聖書解釈の問題

#### 4.1. 解放の解釈学の盲点

しかしながら、私見では解放の諸神学の聖書解釈、すなわち解放の解釈学には問題が内包されていると考えられるのである。その問題とは、聖書の中心的使信が「差別・抑圧からの《解放》」であるということに強調するに急なあまり、聖書のなかにある差別・抑圧の論理そのものを等閑に付してしまう節が見られるということである。

この背後には、解放の諸神学が神学であるがゆえに、当然の前提として抱えている聖書に対する信仰、すなわち「正典/信仰の規準」(canon/regula fidei)たる聖書が「規範化する規範」(norma normans)ないし「規範的権威」(auctoritas normativa)であるとする感覚がア・プリオリに働いているという問題があるものと考えられる<sup>35)</sup>。

要するに、聖書は「無謬」(inerrantia)であり、文字通り「聖なる書」(Sacra Scriptura)であるがゆえに<sup>36)</sup>、常に正しく「解放」の使信を伝えていると信じる聖書信仰が前提にされているということである。それゆえ、解放の解釈学は旧新約聖書が一貫して「差別・抑圧からの《解放》」を証言しているかのように理解してしまっており<sup>37)</sup>、解放の諸神学は一種の教条主義に陥ってしまっていると考えられるのである。そして、私見ではここに解放の解釈学の「盲

<sup>27)</sup> 解放の諸神学の理論と実践との関係については、栗林『荊冠の神学』132-146頁参照。

<sup>28)</sup> グティエレス『解放の神学』185-189頁 (Gutiérrez, *A Theology of Liberation*, 175-178), Cone, *A Black Theology of Liberation*, 197-227; Frederick Herzog, *Liberation Theology: Liberation in the Light of the Fourth Gospel*, New York: Seabury Press, 1972, 45-116; Leonardo Boff, *Jesus the Liberator*, New York: Orbis Books, 1978, 63-79; Kirk, *Liberation Theology*, 123-135 ほか参照。

<sup>29)</sup> John Sobrino, *Christology at the Crossroads: A Latin American Approach*, English translation by John Drury, Maryknoll, New York: Orbis Books, 1978, 79f.; Boff, *Jesus the Liberator*, 264-295 ほか参照。

<sup>30)</sup> 解放の諸神学が依拠する聖書の中心的使信が、「歴史的出来事」にその基礎を置いていることについては、渡辺英俊「現代への『使信』を求めて」『アレテア』14号、日本基督教団出版局、1996年、9頁をも参照。

<sup>31)</sup> 高橋敬基「新約聖書の『神学』と現代的使信—マルコ7:24-30を中心として」『聖書の使信と伝達—関根正雄先生喜寿記念論文集』(『聖書学論集』23号)日本聖書学研究所、山本書店、1989年、400頁参照。

<sup>32)</sup> 渡辺英俊「〈民衆〉の所在—イエスが生きたのと共通の〈低み〉で」『福音と世界』新教出版社、2002年4月号、30-32頁参照。

<sup>33)</sup> Leonardo Boff/Clodovis Boff, *Introducing Liberation Theology*, English translation by Paul Burns, TLS 1, Maryknoll, New York: Orbis Books, 1987, 32. Pippin, *Ideological Criticism*, 267f.をも参照。

<sup>34)</sup> David Tombs, *The Hermeneutics of Liberation*, in: Stanley E. Porter/David Tombs (eds.), *Approaches to New Testament Study*, JSNTSup 120, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995, 310-355が、解放の解釈学を新約聖書学の方法論として分析し、他の解放の諸神学との対話を含めて丁寧に論じている。

<sup>35)</sup> この問題については、拙論「聖書主義の盲点—聖書解釈における他者性の認識」『酪農学園大学紀要 人文・社会科学編』40巻2号、酪農学園大学、2016年、105-107頁参照。

<sup>36)</sup> 「聖書無謬性」(inerrantia Sacrae Scripturae)については、宮川俊行「『聖書の真理』を巡って」『純心人文研究』9号、長崎純心大学、2003年、73-96頁参照。

<sup>37)</sup> アビト/山田『解放の神学と日本』12-15頁は、そのように理解している。

点 (blindness)」（ポール・ド・マン<sup>38)</sup>が潜んでいると考えられるのである<sup>39)</sup>。

#### 4.2. 疑いの解釈学

##### — フェミニスト聖書解釈からの批判

しかしながら、このような解放の解釈学の盲点に逸早く気づいていたのは、ほかならぬ解放の諸神学の潮流に属するフェミニスト神学から生み出されたフェミニスト聖書解釈であった<sup>40)</sup>。フェミニスト聖書学者のエリザベス・シュスラー・フィオレンツァは解放の神学に対して以下のような批判と提言を行っている。

解放の神学者の課題は、フェミニストや社会主義者の攻撃に対して聖書や教会が弁護され得るものであると立証することではない。むしろ、女性たちや貧しい人々への抑圧において聖書がどのように機能しているかということに対して、批判的・包括的な理解を持ち、それによって更なる抑圧へと聖書が誤用されるのを防ぐことである。もしも解放の神学が、聖書伝承の中の抑圧的な諸側面を十分に探求しないのであれば、その擁護姿勢は、教会や教理についての先入観による立場の合理化という意味に取られても仕方がないものになってしまう。フェミニスト神学者は、抑圧されている人々への擁護姿勢のゆえにこそ、断固としてこう主張しなければならないのである。キリスト教伝統の神学的・批判的な分析はコンスタンティヌス時代から始めるべきではなく、キリスト教の特権文書をも分析対象に含むべきであると<sup>41)</sup>。

フィオレンツァはこの批判と提言において、キリスト教の特権的文書である聖書をも分析の対象にし

なくてはならないと明言する。これは長らくキリスト教護教論として在りつづけてきたキリスト教神学に対する明確な批判でもある。特に、その聖書批判は聖書を冒瀆するものとしても受け取られているが、彼女は「抑圧されている人々への擁護姿勢のゆえに」そうすることが断固必要であると言うのである。これは極めて重要な批判と提言であり、フェミニスト聖書解釈はこのように聖書をも含めたキリスト教を根源的に疑っており、それは「疑いの解釈学」(hermeneutics of suspicion)と称される徹底したもののなのである<sup>42)</sup>。

#### 4.3. 解放の諸神学における聖書解釈の問題

##### — 解放の解釈学と疑いの解釈学の対話

このような聖書に対する批判をフェミニスト神学が行いえたのは、この神学が解放の諸神学という神学的潮流に位置づけられつつも、他の解放の諸神学とは一線を画す機能を果たしてきたからにほかならない。すなわち、他の解放の諸神学が実践神学や組織神学の分野においてその成果を上げてきたのに対して、フェミニスト神学は聖書学、とりわけ新約聖書学の分野において目覚ましい研究成果をあげてきたからである。

したがって、フェミニスト神学がまさに聖書学を主要な研究領域としてきたがゆえに、聖書のなかにある差別・抑圧の論理との批判的対話を回避しえない状況に置かれ、聖書の中心的使信として捉えた「差別・抑圧からの《解放》」という新たな「正典のなかの正典」によって、聖書から「差別・抑圧からの《解放》」のメッセージを読み取りつつも、そこからさらに聖書のなかにある「差別・抑圧の論理」を批判し、「フェミニスト視点」によるキリスト教の「再構築」へと向かうことを可能にしたのである<sup>43)</sup>。

キリスト教神学の世界において、これまで解放の諸神学は極めて重要な役割を果たしてきたと言えるが、今後は聖書学の分野において、フェミニスト聖書解釈との対話を行い、「疑いの解釈学」を通して「解放の解釈学」の問題点を省察し、この世界の差別と抑圧の課題だけではなく、聖書やキリスト教に内包される差別と抑圧の問題をも根源的に批判していくことが求められているのである。そのような営為を現実のものとするためには、近代日本の女性とキリスト教を研究する村山由美の次のような指摘が参考

<sup>38)</sup> Paul de Man, *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*, Minneapolis: University of Minnesota, 1983 [= Oxford: Oxford University Press, 1971] 参照。

<sup>39)</sup> 「盲点」の問題については、拙論「聖書主義の盲点」111-112頁参照。

<sup>40)</sup> エリザベス・シュスラー・フィオレンツァ『石ではなくパンを——フェミニスト視点による聖書解釈』(21世紀キリスト教選書) 山口里子訳, 新教出版社, 1992年, 104-118頁 (Elisabeth Schüssler Fiorenza, *Bread Not Stone: The Challenge of Feminist Biblical Interpretation*, Edinburgh: T&T Clark, 1990 [= Boston: Beacon Press, 1984], 49-58) 参照。

<sup>41)</sup> フィオレンツァ『石ではなくパンを』117頁 (Fiorenza, *Bread Not Stone*, 57)。引用は山口里子訳によるが、引用の前半の「貧しい人々」の前に「女性たちや」が抜けていたので、その部分のみ補った。

<sup>42)</sup> フィオレンツァ『石ではなくパンを』104-108, 248頁参照。

<sup>43)</sup> Pippin, *Ideological Criticism*, 270f. 参照。

になる。

資本のグローバル化にともなって権力がさらに集中し増大する今日、虐げられるすべての人々の解放と聖書が無関係でないと考えるところに、フェミニスト聖書批評の未来に向けた大きな意義がある<sup>44)</sup>。

このような「フェミニスト聖書批評の未来に向けた大きな意義」は、貧困と抑圧とに喘ぐ人々の「解放」を求める新たな「神学」として、1960年代後半から1970年代の前半に同時多発的に興った「解放の諸神学」とその聖書解釈原理である「解放の解釈学」の「未来に向けた大きな意義」でもあると言っているのではないであろうか。

## 5. 結 論

ここまで論じてきたことをまとめる。解放の諸神学というポスト・マルクス主義時代に生み出された新たな神学的潮流は、聖書の中心的使信を「差別・抑圧からの《解放》」であると理解し、聖書から「差別・抑圧からの《解放》」のメッセージを読み取り、その「理論と実践」によって、「差別・貧困からの《解放》」を「政治的・社会的」かつ「神学的」に担ってきた。だが、その聖書解釈には「盲点」があった。それは聖書から「解放」を読み取ることに急なあま

り、聖書に内包される差別や抑圧の論理を等閑に付してしまい、聖書は常に正しく「差別・抑圧からの《解放》」の使信を伝えているとする一種の教条主義に陥っているということである。

だが、解放の諸神学の潮流にも属するフェミニスト聖書解釈は逸早くこの「盲点」に気づき、聖書から「差別・抑圧からの《解放》」を読み取りつつも、聖書そのものに「差別・抑圧の論理」が含まれているということを明らかにし、聖書そのものをも批判することを通して、キリスト教や聖書をも根源的に捉え直す道を切り拓くことを可能にしたのである。

解放の諸神学が今後もキリスト教神学の世界において重要な役割を果たしていくことは疑いえない。だが、もし解放の諸神学が現代世界の差別や抑圧を批判していくという営為を続けていくのであれば、その営為はこの世界の差別や抑圧のシステムでもある聖書やキリスト教をも根源的に捉え直していくことへと繋がっていくことが必要である。なぜなら、フェミニスト聖書解釈はまさにそのような営為を実践し続けることによって新たな時代や未来を切り拓くことを可能にしてきたからであり、解放の諸神学の聖書原理である解放の解釈学もまたフェミニスト聖書解釈と同様の営為を実践することによって新たな時代や未来を切り拓くものになりうると考えられるからである。

<sup>44)</sup> 村山由美／浅野淳博／須藤伊知郎「文化研究批評」、浅野／伊東／須藤／辻／中野／廣石／前川／村山『新約聖書解釈の手引き』250頁。なお、村山のこの指摘の背景には、ポストコロニアリズムや第三世界といった重層的な視点をも取り入れた新たなフェミニズムの台頭に伴い、黒人女性による「ウーマニスト神学」やスペイン語圏の女性による「ムヘリスタ神学」が興り、従来の「フェミニスト神学」が「白人中産階級知識人女性」のイデオロギーを体現するものでしかないとの批判が巻き起こっている近年のアメリカのフェミニスト神学をめぐる新しい大きな波がある（同書同頁参照）。